

高貴寺蔵梵文『般若心経』について

奥 風 栄 弘

はじめに

慈雲尊者飲光（1718-1804）が、『梵学津梁』を編纂して二百数十年が経っている。相当な量であるため、その内容全ては判っていない。梵文『般若心経』は「法隆寺貝葉」を初めとして、多く確認されている。高貴寺のご協力により、高貴寺が所蔵する梵文『般若心経』の資料を紹介したい。

1. 高貴寺所蔵の梵文『般若心経』について

高貴寺の所蔵の梵文『般若心経』を調べたところ、12種類あることが判明した。それらを列挙して、次に各梵本の概略を述べてみたい。高貴寺の写真資料の4桁の番号が写本番号である。書名の頭に◎印がついているものは、刊行（木版出版）されているものである。『梵学津梁』は慈雲尊者の著作や収集した梵学、梵字に関する資料を収めている。①-⑤は本詮部にありは他は末詮部にあった。また反転の番号④⑨⑩は、Lokesh Chandra氏により、公開されたものである¹⁾。（文中の下線、太文字等は筆者による。また梵字はローマナイズしている。）

- | | | | |
|---|------------------------|--------|----|
| ① | 『梵本心経』 | (0034) | 本詮 |
| ② | ◎ 『梵本 般若心経刊 語明』 | (0035) | 本詮 |
| ③ | ◎ 『梵漢 普賢行願讃 阿弥陀経 般若心経』 | (0036) | 本詮 |
| ④ | ◎ 『梵篋三本』 | (0037) | 本詮 |
| ⑤ | 『梵篋三本』 | (0038) | 本詮 |
| ⑥ | 『般若波密多心経 梵本』 | (0111) | 末詮 |
| ⑦ | 『般若心経諸譯互證』 | (0112) | 末詮 |
| ⑧ | 『心経梵本諸譯互證』 | (0113) | 末詮 |
| ⑨ | ◎ 『フリタストラ（梵）指註』 | (0114) | 末詮 |
| ⑩ | ◎ 『フリタストラ（梵）國字読』 | (0115) | 末詮 |
| ⑪ | 『梵本般若心経釈』 | (0116) | 末詮 |
| ⑫ | 『梵本 般若心経釋』 | (0335) | 末詮 |

2. 各写本について（紙面の都合上3写本について、概略を述べる。）

(1) ⑦『般若心経諸譯互證』(0112)

表紙には「梵学津梁 卷第四百二十 末詮七十三 末詮般若心経諸譯互證」と書かれており、写本の形は和本形式である。最初に梵本や異訳を合計16本紹介しており16本は下記の通りである。小比丘飲光集と書かれているが、実際に対照している経本は○印のついた6種類の『般若心経』である。「梵本四般」となっているが5本の梵本が書かれており、「對註三本」となっているが2本しか記されていない。（ここでの太文字は、朱書きである。）

梵本四般

和州法隆寺所蔵貝葉

○元和三年丁巳仁和寺 法親王所筆本

旧刻異本心経

常陸國水戸探盈印施本

備中國寶島寺寂巖所校本

對註三本

梵本般若波羅蜜多心経 唐大廣智不空譯

○宋蘭溪大覺律師来朝所將之本是校

異譯九本

摩訶般若波羅蜜多心経 有人云依玄應音義秦朝羅什再譯

○般若波羅蜜多心経 玄奘譯

○同 大唐醴泉寺三藏 般若譯

○摩訶般若波羅蜜大明呪経 羅什譯 貞元録二十 開元十二

○般若波羅蜜多心経 東天竺國 法月三藏譯

佛說般若波羅蜜多心経 義淨譯 此本諸録不載有人云先師遺書中現存

般若波羅蜜多心経 智慧輪譯

普遍智蔵般若波羅蜜多心経 大唐國青龍寺東塔院経本

佛說聖仏母般若波羅蜜多経 宋西天竺三藏朝秦太夫誠光祿郷伝法大師施護奉詔譯

『常陸國水戸探盈印施本』とは、探盈が宝暦12年8月に刊行した『異譯心経竝梵本』²⁾に当たると思われる。この刊本には、『義疏本、御室本、宋本（蘭溪大覺律師）』の梵本3種類を載せている。『宋蘭溪大覺律師来朝所將之本』は、蘭溪大覺律師³⁾が寛元4（1246）に来朝しているので、この時に持ってきたと思われる。『備中國寶島寺寂巖所校本』は、岡山県の宝島寺の『宝島寺所蔵歴史目録』によれば、『般若心経梵本』（宝島寺版）の刊本が存在しており、版本も残っている。刊行した時期は宝暦11年（1761）である。慈雲尊者はこの刊本を入手した可能性がある。し

(122)

高貴寺蔵梵文『般若心経』について (奥 風)

かしここでは、「梵本四般」となっているが5種類の梵本を列挙している。佛敎大学図書館に探盈の『異譯心経』が蔵書としてあった。この本の奥書には、「宝曆十四年甲申正月吉日再刻」となっていた。探盈は宝曆12年に出版し2年後の14年に再出版したことになる。『旧刻異本心経』が宝曆12年版で『常陸國水戸探盈印施本』が宝曆14年版とも考えられる。5種類を列挙しているが、内容的には4種類であるから、「梵本四般」と書かれている可能性もある。これから、⑦『般若心経諸譯互證』が編纂された時期は、宝曆14年1月以降との推測もできる。⑦『般若心経諸譯互證』の編纂時には、『常陸國水戸探盈印施本』（以下『探盈本』と略）を参考にしている箇所がある。破線部が特に顕著な部分である。太文字は共通箇所である。「有人云依玄應音義秦朝羅什再譯」は『探盈本』では「私云依玄應音義秦朝羅什再譯」となり「貞元録二十 開元十二」は、そのまま引用している。「此本諸録不載有人云先師遺書中現存」は『探盈本』では、「此本不載諸録余先師遺書中現有古筆本」となっている。『探盈本』の構成は各經典梵本の全文（義浄訳は一部略、智慧輪訳は「如是我聞云云」で以下は略）を順に並べている。しかし、⑦『般若心経諸譯互證』の構成は、梵文と漢訳の対照となっている。また『宋蘭溪大覺律師來朝所將之本』は、音写漢字を梵字に変換されており、緻密な研究と整理が行われている。

(2) ⑧『心経梵本諸譯互證』(0113)

表紙には『心経梵本諸譯互證 末詮五十三』と書かれている。本文の題目は『梵学津梁 末詮二之五十三 般若心経諸譯互證 小比丘飲光集』と書かれており、写本の形は和本形式である。先の⑦『般若心経諸譯互證』を清書と整理したものと思われる。梵本や異訳を合計16本紹介している。特に変わったところは、「法隆寺貝葉」の梵文を新たに書き入れている。施護訳は、あとから書き加えられている。先の「對註三本」も「對註二本」に書き改めている。

(3) ⑨『フリタストラ (梵) 指註』(0114)

表紙には『hrdasutra 指註 雙龍庵蔵』と書かれている。この梵本は②『梵本般若心経刊 語明』と同じものである。朱書きで梵字の下に漢字で訳を書いている。『般若心経』の終了記号の後に小さい梵字で *yugaranāga vihare maitramegha vandam likha* と書いている。yugara (yugala か? 一對で双の意味) nāga (龍) vihare (vihāra か? 寺院, 庵の意味) maitra (慈) megha (雲) vandam (vandana か? 敬意の意味) likha (√likh には書くという意味がある)。慈雲尊者は日本語をサンスクリットに訳することも行っている。語明の奥書の後に、慈雲尊者の直筆で以下のように書かれている。

明和八年卯十二月鎮之 河内國河内郡額田邑瀧山雙龍庵 小比丘飲光敬誌

慈雲尊者は41歳の時、生駒山の西の峯、長尾の滝の辺りに「雙龍庵」⁴⁾という小さな庵室を作って隠遁している。

むすび

今回は、高貴寺所蔵の12種類の梵文『般若心経』の紹介をし、3写本の概略を述べてみた。慈雲尊者が、日本語を梵語に翻訳した箇所もみられた。また梵本を供養のため、写経したものもあった。一部前回発表した高貴寺蔵梵文『阿弥陀経』と重なるところもあった。年代の分かるものが3種類しか無く梵本の前後関係には、踏み込めなかった。ただし今後注目すべきことは、法隆寺の梵本も含まれた⑧『心経梵本諸譯互證』である。その下書きと考えられる⑦『般若心経諸譯互證』も参考にして、対照を行い綿密な調査をしていきたい。

1) Lokesh Chandra (1972), *Sanskrit Manuscripts From Japan*, New Delhi, pp. 299–343: 403–406; 407–412.

2) 白石真道 (1988) 「般若心経略梵本の研究」, 『白石真道仏教学論文集』, p. 467.

3) 中村元 (1987) 『新仏教辞典』誠信書房, p. 535 より。

「蘭溪道隆 勅諡は大覚禪師 (1213–1278) 中国臨済の禅僧で1246 (寛元4), 弟子と日本に来て、北条時頼の依頼で鎌倉建長寺の開山となり、京都建仁寺に迎えられまた鎌倉に戻る。彼は本格的に弟子の育成に努め規律が厳重で中傷されたり日蓮に悪口されるが、禅の格式を正しく伝えた功労者である。この法流を大覚派また建長門徒と称し、日本禅宗二十四流の一。」

4) 種智院大学密教資料研究所 (1997) 『長谷寶秀全集』第1巻, 法蔵館, p. 260 と p. 261 に雙龍庵の記述がある。要略すれば、「慈雲尊者は四十一歳の時に、河内国河内郡額田村の不動寺から十八町の山奥の長尾の滝の辺りに雙龍庵という小さな庵室を作って隠遁された。」となる。

〈キーワード〉 高貴寺, 梵字, 慈雲尊者, 『般若心経』

(佛教大学通信教育部博士課程)